

特65

139



波の歌

田口掬江原著
白羊作詩



序

小説『女夫波』は自分の生涯の第二期初頭に於ける處女作で、近作『伯爵夫人』と共に愛兒も同様の産物です。しかも此第一兒は後者に比して甚だ平板であるが、それでも自分の理想といふものは、十分に吹込んである積りてす。

て初兒に吹込んだ自分の考へてすが、之は「清純なる愛の力は何れ程の強き

を有して居るか」と云ふ事を象かたちに現はさうと企てたのです、然まらば此目的が十分に達したのか如何どうかと云ふと、微力な自分の事だから恐らく豫期の半ばにも達しますまい、所謂棒ほど糞けふて針ほどかなふで、思へば慚愧に堪へませぬ。

處が此度詩壇に盛名ある溝口君が、此初兒の考へを長詩となして、醉なる愛を欲する天下の士女に誦はせやうと云ふ、自分の現はし得なかつた考へが、

力ある音律となつて現はれて、こゝに始めて豫望を完成さして呉れるのでせう、序文を書けと言ふのに對して、却つて謝辭を呈するのも、自分に取つては至當の事と言ふものでせう。

明治三十九年二月

田口掬汀

予が告白

紳士及貴女諸君

當代散文壇の逸品を通俗詩に醜作するこ
とに關する予が事業は、茲に一先づ終結
を告げたり。即ち『女夫波の歌』は、予が
諸君の前に提供する現代小説醜詩の第一
期に於ける最後のものなり。

原著『女夫波』は、學兄田口掬汀君の創作

に係り、通篇女性に對する同情の頗る深厚なるものあると共に、女主人公の意思の健實なる、家庭小説として、近時稀に見る所なり。故に予は、此名譽ある第一期の終結を飾るに、此好著を以てすることを得たるを、衷心より愉快に感ず。今や世紀末の暗澹たる思潮が、全世界の前に、其厭ふ可き表面を暴露する時に方

り、平和にして光明ある思想を、世界の一部に傳ふることは、決して徒爾ならずとの信念に依り、『不如歸の歌』等、此種二三の醜詩を公刊したる予の行爲は、決して非難を招くべきものにあらざること予は自ら信ず。

終に、予は、予の醜作に對して快諾の意を表示せられたる紳士徳富蘆花、菊池幽

芳、田口掬汀諸氏並に春陽堂主人に對し敬虔の念を以て、深く謝意を致し、併せて巴調妄に原著の妙を傷けたることを、大方に陳謝す。

千九百〇六年春陽三月

溝口白羊

目次

一	鴛鴦の遊	一
二	破るゝ夢	一一
三	露の袂	二一
四	他かぬ別	三一
五	行く雁	四一
六	留守の思	五一
七	誘ふ水	六一
八	積る憂	七一
九	悪だくみ	八一

十	立つ春	一九
十一	ひとつの秋	一〇
十二	片戀	一一
十三	變る淵瀬	一二
十四	散行く花	一三
十五	主無き宿	一四
十六	春風	一五
十七	秋の思	一六
十八	おく露	一七
十九	波の花	一八

二十 鹿島立 一九

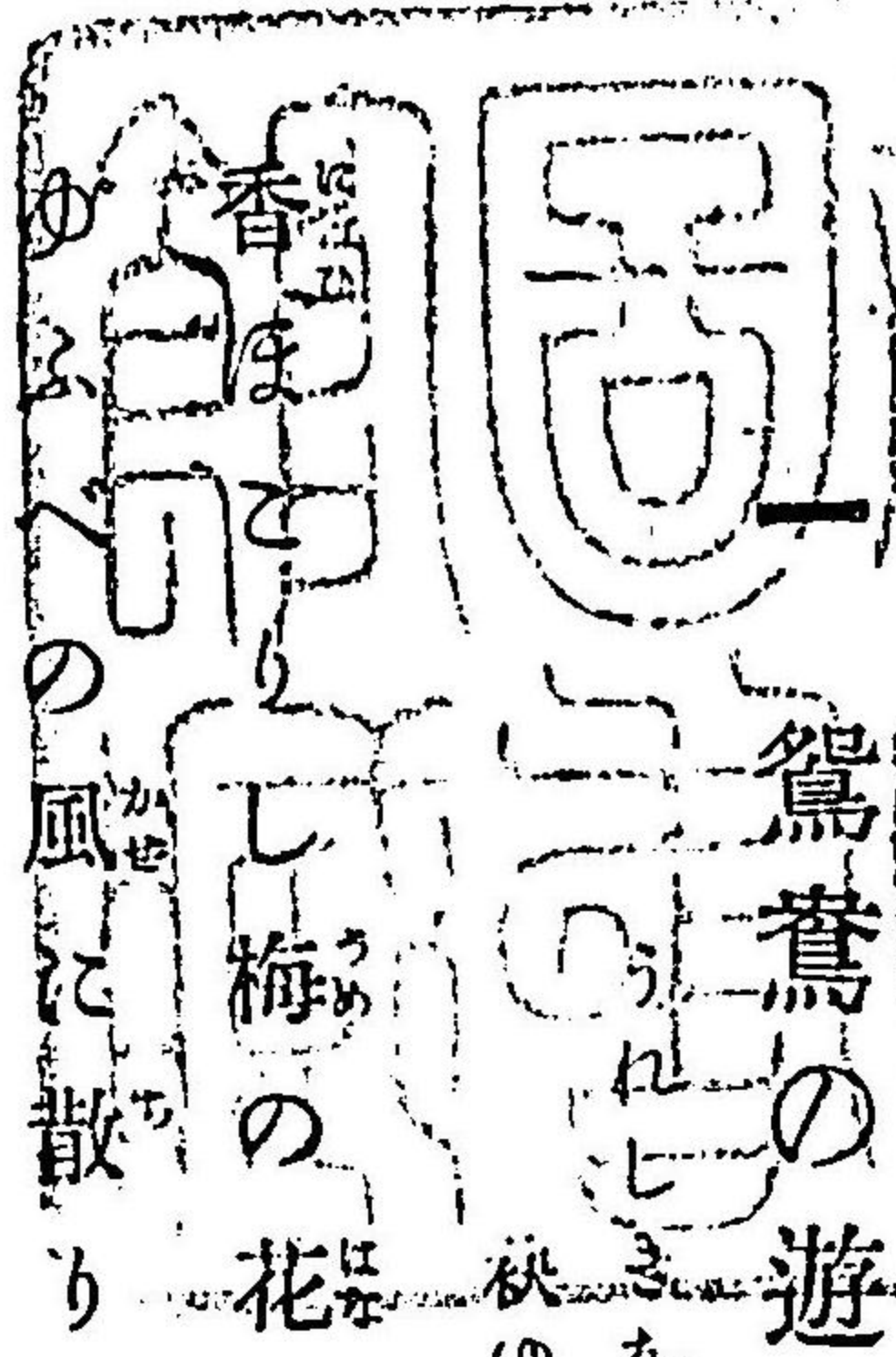


家庭新詩

女夫波の歌

鴛鴦の遊

きを何につまむ唐衣
袂ゆたかにたてといはましな



香まこりし梅の花
の風に散り過ぎて

春まだ浅き如月の
濱邊に遊ぶ人も無し

溝口白羊作

片瀬のわたりに来て見れば
鹽焚く煙暇を無み
黄楊の小櫛を把も見ぬ
海女が鏡か相模灘

浮ぶ白帆に照れる日の
影も長閑けき海の面に
遠く見ゆるは大島か
三崎あたりは霞みつゝ

春のみ神の御宮居
いづこの果と分かねども
南の國ゆ吹寄する
風そよくと暖き

斯かる處にうち伴れて
砂濱邊を睦まじく
さまよふ若き妹と脊は
いづこの里の人ならむ

夫と見ゆるは二十まり
七つか八つか安らかなの
笑を片頬に浮べつゝ
威儀ある眉の美しく

女は二十程過ぎぬ
若き姿のけだかさや
夫を梅とたとへなば
これは匂へる菊ならし

二人がいとも樂しげに
微笑み合ひつゝ、語らひつ
春の渚に遊ぶなる
思は何にたとふべき

あはれ如何なる人なれば
生活暇無き現世に
斯く長閑なる上ぞとて
海人が羨む仲らひの

夫は植村融とて
内の務のつかさびと
妻は俊子と名を呼びて
鴛鴦の契ぞいと深き

妹脊は共に打伴れて
人無き道を歩みしが
彼方の磯に人々が
網引く様を認めつゝ

急ぎて行けば遅ましき
漁男共が同音に
勇む掛聲活々と
赤ら頬照らす夕日影

躍る銀鱗潑漉と
網には海の幸満ちて
村の平和を壽ぎの
風やはらかに渡りけり

霞む彼方を眺むれば
浪も静にうらくと
夢に入るかや夕ぐれの
靄に隠るゝ濱千鳥

清き眺に酔はされて
心とられし妹と脊が
夢と佇む折柄に
後に來たる人や誰

砂踏みしだく足音に
誰ぞと融が振向けば
宿の女が電報を
手に持ちつゝも來りけり

融は早く手にとりて
披きて見しが眺入る
面の色も變りつゝ
疾く歸らんと言ひ出でぬ

あはれ平和の夢に酔ふ
鴛鴦の妹脊を心無く
驚かしたる電報は
如何なる事や傳へけん

二 破るゝ夢

命にもまさりて惜しくあるものは

見果てぬ夢のさむるなりけり

周章しげの電報に
妹脊は興を破られて
俾急がせ我家に
歸りて來れば黄昏の

雨霏々々と降りそゞぐ
都の町の淋しさに
往かふ人も途絶えつゝ
我家の門は鎖したり

主人思ひの婢女も
妹脊の歸り知らぬげに
出迎せぬが不審かしさ
二人は眉を擧めしが

歸りて姉に言問へば
疾く歸れとの電報を
打ちたることも知らぬ顔
早き歸宅を怪しむに

妹脊は夢の心地しつ
何の恨に誰人が
名を偽りて要も無き
かゝる戯れ爲しにけん

不思議の事と三人が
いとよいぶかる門の邊に
轍の響聞こえつゝ
使の人の來りけり

何處よりぞと尋ぬれば
植村君に疾く來よと
次官の君が召しぞある
いざ疾くところ傳ふるに

さては次官の用ありて
姉の名書きし電報に
呼びやしけんと領さつ
融は急ぎ赴きぬ

往けば日頭と姓を呼ぶ
次官は家に待居つゝ
如何なる用と尋問ふ
融迎へて物語

汝が書さし論説の
端無く事を起しつゝ
上の谷の重ければ
洋行せよと告ぐるなる

聞く其胸の驚きや
あはれ谷の重くとも
愛しき俊子と別れ居の
つらさにやはか及ぶべき

況してや妻は我姉と
互の胸の奥底に
融けぬ思の潜みつゝ
深き惱に沈めるを

あゝいかでかは唯獨
海の彼方に隔たりて
我胸安き宵あらむ
想へば心亂れつゝ

扱あつかさり乍なら恩おん義ぎある
人ひとに答こたを及およぼさん
其その身みの罪つみを思おもひては
辭いなむに難かたき義ぎ理りの極か枯せ

憲おきて法ての正み理ちにうち背そむき
僻しん事わざ多おほき大おと臣ぢ等らを
責せむるが何なにの咎とがぞと
融とほは胸むねに怒いかれども

強しひて心こゝろを抑おさへつゝ、
熱あつき涙なみだと諸もろ共ともに
心こゝろ進すすまぬ洋よう行かうを
承うけぞ諾うべなふ苦くるしさよ

融とほの答こた打うち聞ききて
足たらへる氣けにも微ほ笑あめる
日ひ頭かみ次じ官くわんに引ひ換かへし
人ひとの思おもひや如い何かならん

止むる袖を振り切りて
門に出づれば小夜更の
空に瞬く星の影
闇の深さは愈りつゝ

三 露の袂

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の

人こそ知らねかほくまもなし

楽し遊を思はずの
電報に破られて
夢驚きし妹と脊が
薄き幸こそあはれなれ

榮さかの夢ゆめのまだ覺さめぬ
姉あねは我わが身みに比たぐらへて
弟あとうが花はなの鹿か島しま立たち
譽ほまれの上うへを祝いはへども

何なにを譽ほまれぞ罪つみならぬ
罪つみを抱いだいて故こ國くにを
悲かなしく出いづる其その人ひとの
深ふかき心こころは騒さわぎつゝ
深ふかき心こころは騒さわぎつゝ

我われと別わかれて其その後あとの
俊と子こが胸むねの悲かな哀しみを
思おもひ遣やりては今いま更さらに
たゆたはれぬる雄を心こころや

あはれ俊と子こが夜よの衣ものは
人ひとこそ知しらね乾かはく間まも
渚なぎさに立たちし袖そで袂たもと
濡ぬれて朽くちなむ思おもひなり

あゝ我夫の姉君と
思へばこそされ身に及ぶ
情の限盡せるに
餘りつれ無き御心や

つらき運命の死別れ
嫁ぎせし身を歸來て
弟の家に寄すればと
われから僻む御胸の

何につけても針合む
仰せを聞くに堪えざるに
頼む夫と離れては
誰を力に慰めむ

それよこれよと思ひては
弱き我身に堪へぬ迄
かゝる重荷のいと辛く
死ぬにもまさる悩み哉

今日も僅の言葉より
姉は又もや慍みて
面の色も變りつゝ
足音荒く出行きぬ

残る妹脊は思はずも
顔見合はせて歎きしが
融は風に吹かれんと
庭下駄履いて下立つに

俊子も夫の跡追ひて
庭の方へと歩みしが
仰げば星の影冴えて
墨繪に似たる夜の色

上野あたりは魔の潜む
怖ろし森と見られつゝ
未だ消え残る町々の
灯は淡く光りけり

こゝへと夫が言ふ儘に
呼ばれて其處に赴けば
情を籠めて言残す
融の眼も曇りつゝ

「我が出し跡は如何許
辛さ悲しさ愈るらむ
若き御身のいとしけど
堪へて待てよ」と言ふ夫を

勵まさんとや凜々しげに
「安んじ給へ君まさぬ
跡の事はと言へど猶
聲は震ひて聞えけり

融は森を仰ぎつゝ
「此處なる花の咲く頃は
太平洋に月や見む」
啣ちて我と垂頭れぬ

たゞ何と無き淋しさに
胸打迫る花妻の
心の中や如何ならん
夜半を告ぐる鐘の聲

四 飽かぬ別

あふさかの關し正しきものならば

飽かずわかるゝ君をといめよ

華々しやと見る程に
頓てうつらふ夕映の
消ゆれば淋し暮の空
夢は儚無きものなるを

何の芳香に酔はされて
花の榮えにあこがるゝ
おろかの蝶が舉動を
羨しとも思ふらん

日頭の家いへに招まねがれて
我われをば妻つまに望のぞみたる
人のありぞと聞ききしより
虚榮はな追おふ夢ゆめに迷まよひつゝ

融とほろの姉あねが胸むねの中うちは
酔よめへるが如ごとく今いま成なりて
花はなの色いろ香かのうつろろふも
忘わすれし如ごとき夢ゆめ心こゝろ地ち

我わが心こゝろには引ひ換かへて
榮さかの夢ゆめをよろこばず
富とみと貴くら位ゐを塵ちりの如ごとく
蔑なみする弟あとうち口くち惜おしく

それにつけても其妻の
俊子を仇の如くにも
憎む心の淺間しや
酷さはいよゝ加はりつ

心雄々しき性乍ら
美しきものはいと脆き
運命のがれぬ人の身の
女は弱きものなるを

戀しき夫に離さるゝ
まだ其上に意地悪き
義姉を仰ぎて二年を
送るつらさぞ思はるゝ

俊子は濕る袂をば
女々しと獨叱りつゝ
夫が旅の仕度をば
涙にすなるあはれさや

これもおかれもと其夫が
用ひの品を革匣に
入るゝにつけて思ひ出る
樂し昨日の夢の跡

追憶多き品々の
一つくを入れ行くに
何やら惜しき心地して
其手も澁りくつゝ

旅にありたる道伴の
一人々々を失ひて
暮れ行く路に唯獨
はぐれし如き憂思

歎に沈む折柄に
後の襖開きつゝ
又荒らかに締寄せて
立去る義姉の後影

微笑見せて送るべき
夫の門出を悲哀の
涙に沈む吾身をば
俊子は我と叱れども

この六ヶしき姉君に
仕へて過ぎん二年の
其苦みを思うては
又も涙の湧出でし

思はず夫の衣の上に
落すや露の一しづく
世は櫻咲く春ながら
俊子は秋の袂なり

折しもあれや二階には
聳を送ると出て来し
俊子の父が高聲に
面白げなる笑話

聞くに俊子は其父が
「男に成りて留守せよ」と
訓へし言を思ひ出て
心勵ます笑顔かな

五行く雁

春がすみ立つを見すて、行雁は

花なき里にすみやならへる

堇摘む子の振袖に
吹くや春風そよくと
深山の雪も融け初めて
鳴く百鳥の聲清し

都大路に來て見れば
柳櫻をこさませ
錦織なす春装
霞は町を鎖しつゝ

いと麗かに霽れ渡る
空のけしきも美しく
うき立つ春の人心
振捨難き眺めなり

あはれや斯かる春をしも
跡に見捨てし悲しくも
千里の外に鹿島立つ
人の心や如何ならん

融は花に反きつゝ
うからやからに送られて
戀しき妻や人々と
今日を離別の船の旅

羨^{うらやま}しさの旅^{たび}立^{たち}と
心得^{こころえ}知らぬ學^{とも}友^{とも}は
妬^{ねた}ましげにも贅^{ぜい}せども
何^{なに}を名^な譽^ほの我^{わが}上^{うへ}ぞ

「さらば人々^{ひと}別^{わか}れむ」と
言葉^{ことば}ばかりは勇^{いさ}ましく
いと雄^を心^{こころ}しくも述^のぶれども
奥^{おく}の心^{こころ}は裏^{うら}切^{きり}りて

船^ねまで送^{おく}る人々^{ひと}の
手^てを握^{にぎ}るにもうち震^{ふる}ふ
胸^{むね}の動^{どう}悸^きは隠^{かく}れ無^なく
淋^{しみ}し思^{おも}ひぞ堪^たへ難^{がた}さ

「船^{ふね}早^{はや}出^いでむ、いざや疾^とく
見^み送^{おく}り人は歸^{かへ}れや」と
無^な情^{なさ}さ水^か夫^こが呼^よび聲^{こゑ}に
彼^{かれ}の眼^{まなこ}はうるみつゝ

父の後に従ひて
いと悲しげに下りて行く
妻の俊子を呼止めて
固く其手を握り乍ら

「健かなれ」と言ふ聲に
百の思や籠るらむ
泣かじとすれど堰出づる
涙に妻も咽びしが

千々の思に荻菰と
亂るゝ胸を抑へつも
悲しく下る階段の
一つくに遠ざかる

あゝ此船を離れなば
夫は千里の遠方に
我は淋しき我家に
別れて憂きを泣く身かや

思へば足の澁れども
詮も無き身の口惜しく
元の端艇に乗り入て
悲しく落つる袖の露

別離を告ぐるフリエートの
響に心轟きて
堰來る涙拂ひつゝ
立てば亂るゝさゞれ波

船は港を離れつゝ
「萬歳」呼ばふ聲々は
夕の空に響けども
煙の影ぞうすれ行く

あゝ二筋の黒煙
幾十の恨もたらしめて
何處の空に消ゆるらむ
運命悲しき浮舟の

俊子^{とこ}は堪^たへず咽^{なげ}びつゝ
父^{ちち}の膝^{ひざ}に身^みを伏^ふしぬ
夜^よは犇^{ひし}々と迫^{せま}りつゝ
闇^{やみ}は我^{われ}世^よに漲^{みなぎ}りて

六 留守の思

風ふけば沖津白浪たつた山

夜半にや君がひとりこゆらむ

赤^{あか}き霞^{かすみ}と眺^{なが}めつる
上^{うへ}野^のの空^{そら}はいつしかに
花^{はな}爛^{らん}漫^{まん}と匂^{ほに}ひつゝ
人^{ひと}も春^{はる}なる花^{はな}の宴^{えん}

老も若さも睦まじく
手に手をとりにて行く影を
見るに俊子が可憐なる
心の底や如何ならん

悲しき身をば垂籠めて
春の行方も知らぬ間に
待ちつる花もうつろひて
風が持て来る散櫻

「あゝ我夫を載せて行く
船は何處を馳するらむ
馴れぬ海氣に侵されて
若しも恙のまさずや」と

日頭の家へ出行きて
義姉は留主なる居間の中
俊子は夫を思ひ侘び
乾さぬ袂の露滋し

折柄門にお歸りと
呼ぶ高聲の聞こゆるに
淨乎と忘れつ嬉しげに
微笑み乍ら立ちにしが

あらざりけりと悟りては
又も愁に奪られつゝ
姉の歸宅を玄關に
つらく迎ふるあはれさよ

姉は見知らぬ美しき
少女姿の客人を
共に伴立ち歸りつゝ
饗應顔の主人振

これは日頭の姫君に
富美子と申す方ぞとて
俊子に告ぐる其面の
誇りかなるが憎々し

富美子は己が行末の
夫と願ひし融をば
俊子の爲に奪はれて
まだ忘れぬ其恨

融の姉が何につけ
にくき思の断えやらぬ
胸の炎をあふらせて
俊子を責むる夜叉心

悪き人よと思へども
夫に離れて頼無き
身は大洋に漂ひて
榴緒断へたる悲しさに

涙呑みつゝ忍びつゝ
つらき浮世の習慣と
強ひてもつくる微笑の
裏の思ぞいたはしき

富美子は勝を誇りつゝ
猶様々に針含む
言葉に俊子苦めて
微笑つゝも出立ちぬ

位貴き其父の
家に生れし身を持ちて
斯く仍無き舉動を
世人は何と見るやらん

富美子が卑き心をば
俊子は胸にあはれみて
送り出づるも却々に
心進まぬ宵乍ら

騒ぐ心を抑へつゝ
言葉と胸は反對に
禮いと厚く歸り行く
富美子を送る家の門

車くるまの影かげを見送みおくりて
淋ましく立たてば遠とほざ行ゆく
轍わだちの音おとも犇ひし々くと
胸むねに響ひびきて聞きこゆなり

七 誘ふ水

わびぬれば身をうき草のれをたえて

誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

花はなの衣ころもを脱ぬぎ替かへて
若わか葉はの梢こずえ涼すずしげに
仰あぎし夏なつもいつしかに
水み無な月づき頃ころと成なりにけり

色香妙なる姥櫻
散らすに惜き盛をば
再び春に會はずやと
誘はれたる浮心

千代かけてもと契りけん
昔の夫が亡魂は
深き怨を抱きつゝ
草葉の蔭に迷へるを

知るや知らずや浮雲の
梯攀づる果敢無ゆめ
覺めて悔いなむ世ありとは
知らぬ心のあいなさよ

融の姉は縣知事が
我をば妻に望むぞと
聞くに心の波立ちて
榮の夢に迷ひつゝ

富美子が道に背きたる
戀遂げたさの一筋に
掛くる情と知りもせて
甘さ勸告の懐かしく

流石に底の良心には
「不貞者よ」と呼ぶ聲の
何方と無く聞こゆげの
思に胸の騒げども

又むらくと浮び来る
榮華の夢に酔はされて
現とも無く佇める
彼方に見えし人の影

融の姉と諸共に
こゝなる日頭別邸に
今日招かれし客人の
高嶺知事を來りけり

この人の上細々と
融の姉に説き居たる
富美子はそれと見るよりも
笑顔残して立去りぬ

我をば戀ふる其人と
とり残されし耻かしさ
所在無げにも立つ人を
高嶺は袖ひきとめて

胸の思を打出る
言葉をそれと聞き入れる
融の姉の胸の中は
早鐘の如亂れつゝ

花の乙女が初戀の
若き面に見る如く
頬は紅の色染めて
遅れ毛風に震ふかな

あゝ望みても無き幸の
此身に落つる嬉しさも
位を厭ふ弟の
斯くと聞きなば如何ならん

嬉しと思ふ此縁も
許さざらんと思ひては
今更乍ら弟や
俊子の心恨めしく

物をも言はず佇める
横頬を照らす月の影
いたく酔ひたる高嶺は
眼織めて見惚れつゝ

遠き彼方の座敷には
遊び始る景色して
若き人等が聲々に
いと賑やかなの亂調や

髪をすべりし月光は
今池の面に影投げて
砕くる浪の燦々ど
心すゞじき眺かな

八 積る 憂

“Let winds be shrill, let waves roll high,

I fear not waves nor wind”

毒の香に酔はされて
義姉がいとしも怖ろしき
巧みを己が身の上
加ふることも白真弓

知らても安き身ならぬを
猶つらかれと苦むる
融の姉の心には
人食ふ鬼や潜むらん

俊子は夫が名代と
今日大臣が譽ある
銀婚式を喜びの
宴に参る花装

眺も清き品川の
海を一目の高殿に
上れば流石曇りたる
心の雲も霽れにつ

友なる美津子共々に
打伴立ちて歸路の
空は冴えたる月の色
千里の外も見ゆるなり

月の光を身に浴びて
交深き友どちの
二人は人の跡絶えし
公園の夜を歩みしが

夫の上を思ひては
愁に沈む俊子をば
美津子は力添へつゝも
情深くぞ慰むる

浪に漂ふ現身の
救を得たる心地して
俊子はいとも嬉しさに
力も強く手を握りぬ

互に固く握る手に
通ふ情や真心や
楽しき末を契りつゝ
二人勇みて別れけり

俊子はいとも情ある
美津子の言に勵まされ
深く心を決めつゝ
家に歸れば戸は鎖ぢて

今歸りぬと呼はれど
内に答ふる者も無し
不審かしみつゝ入ぬれば
鼻撲つ酒の高香

義姉は何處と尋ねれば
髻違ましき荒し男と
いと埒無くも酔ひしれて
對ひ合ひたる室の中

餘りの事に驚きて
立去らんずる俊子をば
止むる言葉も亂れつゝ
其舉動の苦々し

我われを女をんなと侮あはりて
夫おつとが留る主すを亂みださんと
圖はかる惡あく魔まと睨にらみつゝ
責せむる言こと葉はの銳すざとさに

いとにくさげの荒あらし男をも
返かへす言こと葉はに困くるしみつゝ
冷つめたき笑えみを頬ほに浮うけて
空そら嘯うそきてありけるが

融とほの姉あねはいと憎にくき
俊とし子こに己おのが男をとこをば
罵ののられたる憤いきどほり懣げん
醉あひたる眼まなこも血ち走はしりて

俊とし子こが止とどむる袂たもとをば
荒あら々あしくも拂はらひつゝ
共ともにありける高たか嶺みねと
打うち伴たね立ちて出いでゝ行ゆく

跡見送りて忙然と
俊子は獨佇みぬ
止度もなしに湧出る
涙は瀧と流れつゝ

九 悪だくみ

天の原ふみ轟かし鳴る神も

思ふ中をばさくるものかは

神が結びし妹と脊の
契の糸は何時の世も
解けぬ運命のいと固く
ほぐらさるべき縁ならず

況してやこれは相思ふ
二人の胸に繋がるゝ
愛の鎖の重ければ
人手に解けん誓かは

富美子は己が初恋の
敗れし事の怨めしく
それにつけても睦まじき
融夫婦の妬ましさ

融の姉が榮望む
浮し心に取入つ
にくき俊子をして
望遂げんと圖りしが

融の姉が今更に
たゆたふ振の恨めしく
涙流して訴ふる
心の中ぞ笑止なる

巖いはと固かたき決心けつしんの
動うごかぬ様さまを認みとめては
手てを施ほしさん術すべも無なく
誓ちかひ變かへまく思おもへども

今いまを榮さかえの己おのが身みの
縁えにしむす結むすびし其その人ひとの
切せつなる頼たのみ詮せん無なさに
言こと葉はも厚あつく慰なぐさめつ

今いま四し五ご日にちを待まちまさは
俊とし子こを追おひて必かならずぞ
君きみを義い妹いとと迎むかへむと
契ちぎる心こゝろの怖おそろしや

折せり柄から來きつる高たか嶺みねと
三み人りひとしく伴つれ立たちて
愛あな宕ごの公そ園のの木こ暗くらに
如い何かなる巧たくみするやらむ

我わが身みの上うへにふりかゝる
其その禍わざ事ごとを謀はかるとは
知しらぬ俊とこ子こは義あ姉ねの跡あと
慕したひて此こ處いに來きたりしが

それと見みるより其その義あ姉ねの
袖そでを捉とへて様さま々に
歸かり給たまへと願ねがへども
聞きかぬ心こころの無な情なさよ

悪いくき富とみ美み子こや高たか嶺みねの
嘲あざける聲こゑを跡あとにして
恨うら呑みのみつゝ歸かり行ゆく
俊とこ子この胸むねは亂みだれつゝ

何なにに斯か迄まで憂うれ目めをば
見みる我わが身みどと悲かなしさ
袖そでの染そめ色いろ變かはる迄まで
歎なげに沈しづむ涙なみだかな

折しもあれや門の方に
轍の音の聞こえつゝ
訪ひ來し人は懐しき
戀しき友の美津子なり

俊子は募る涙をば
手に持つ帛に拭ひつゝ
胸の口惜しさ語らふを
聞くに美津子も咽びつゝ

泣入る人を慰むる
聲も涙にうるみしが
下に聞こゆる其義姉の
聲に二人は驚きつ

婢女荒く叱りつゝ
我調度をば持出すを
涙流して共々に
言葉盡して止むれど

袂拂ひて出て行く
融の姉のつれなさや
驕の人を乗せて行く
俚は風の如くなり

十立つ春

春たてど花も匂はぬ山里は、

ものうかる音に驚ぞなく

縊縷させてふ虫の音を
いともあはれと聞く程に
秋も何時しか暮方の
思淋しさ夕まぐれ

俊子は獨つくと
樂しき夢を追憶の
覺めて我身にかへりては
忍びぞ兼ねる憂運命

まだ一年も過ぎぬ間を
堪へも得ずていかてかは
猶一年に餘る日の
留守の務を果し得ん

と思へば心勵まして
悲しく暮らす年月も
夫が歸朝の追々に
近づくことに慰めつ

義姉の家出を聞くよりも
留守の淋しさ思ひ遣り
父が上せし弟を
せめて力と頼み草

長く仕へし婢女を
歸せし跡は姉弟が
廣き家居に只二人
春待つことのあはれさ

世は新玉の春準備
門松立て、勇ましく
子等の面には微笑の
いと嬉しげに見ゆれども

俊子は義姉が高嶺と
縁を結ぶ祝賀の
宴の招待断りて
後は音信も絶えし身の

悲しき事をつくぐと
思ふに胸も閉ぢられて
つらき思の様々に
いかで樂しき春ならん

我身一人にあるならば、
獨靜に垂籠めて、
あらまじものを現世の
習慣は夫れも成兼て

残し置かれし貯蓄の
黄金を取に赴くと
車奔らせ銀行に
行きて告ぐれば思ひきや

苦しき折の扶助にと
夫が残せし貯蓄は
いつしか義姉の出しつゝ
残れる額も空蟬の

餘りの事に驚きて
夢の心地に詮術も
力も盡きて崩折るゝ
俊子の胸や如何ならん

斯か
から
ん
折の
友
達と
美
津
子の
許を
訪
な
ひ
て
須
臾
が
程
の
用
達
を
頼
む
と
家
は
出
て
ぬ
れ
ど

到
り
て
見
れ
ば
流
石
に
言
ひ
出
て
難
さ
耻
か
し
さ
猶
豫
ふ
中
に
時
過
ぎ
て
望
空
し
く
歸
ら
ふ
や

心
定
め
て
と
り
出
す
花
染
衣
綾
錦
追
憶
多
き
品
々
を
涙
に
包
む
小
風
呂
敷

あ
は
れ
覺
え
も
知
ら
ざ
り
し
悲
し
き
業
を
習
ひ
つ
く
借
此
後
の
憂
日
を
ば
如
何
に
姉
弟
が
送
る
べ
き

聞きこにい入いれれども目めはめ冴さえて
寐ねられぬぬ夜よるのの幻まぼろし象しに
見みゆるはは戀こひしし夫つまのの影かげ
いいづづここぞぞ五ご位みのの鳴なききてて行ゆく

十一 ひとつの秋

世の中は昔よりやは憂かりけむ

我身ひとつの爲に成れるか

涙なみだにに送おくるる年とし暮くれて
世よはは新あら玉たまのの初はつ春はるに
立た返かへれれども融とけけややららぬ
俊と子こがが胸むねのの厚あつ氷こほり

夢の様に過ぎにける
其一年を追憶の
樂しかりける春日は
いと疾く暮れて悲しさや

若葉も枯るゝ憂運命
籬動かし吹く風を
我身一つの秋かとも
身に泌みてこそ覺えしが

今朝初春のよるこびに
山も笑うて見ゆなるを
猶うき秋に囚はれし
胸のうちこそ淋しけれ

俊子は獨つくゝと
愁の袖のしめるとき
うれしや待ちし音信の
夫の玉章來りけり

凋^{しほ}みし花^{はな}の水^{みづ}を得^えて
若^{わか}き生^い命^ぢに懸^かる如^{ごと}
俊^{とし}子^この胸^{むね}も活^{いき}々^々と
霽^はる心^{こゝろ}地^ちに勇^{いさ}みしが

勇^{いさ}みしことも仇^{あだ}なりや
萬^{ばん}一^{いつ}の時^{とき}の爲^{ため}にとて
預^{あづか}け置^おきつる金^{かね}ありと
夫^{つま}の手^て紙^{がみ}を便^{たより}にて

乾^{から}風^{かぜ}寒^{さむ}き霜^{しも}の夜^よを
日^ひ頭^{かみ}の方^{かた}に往^ゆき見^みれば
力^{ちから}と頼^{たの}む預^{あづか}金^{かね}さへも
いっしか姉^{あね}に盗^{ぬす}まれつ

涙^{なみだ}乍^{はな}らに悄^{せう}然^{ぜん}と
出^いづるや辛^{つら}き門^{かど}の邊^へを
憎^{にく}み富^ふ美^み子^こが嘲^{あざわ}りの
冷^つめたさ笑^{えみ}に送^{おく}られて

あゝ何なれば斯ばかり
我身に辛き現世ぞ
生命の綱も断ちされて
何處に安く枕かん

年端も行かぬ弟が
姉を思ひの深情に
慰められたつ慰めつ
細々立つる淡煙

餘りといへば痛はし
姉が窆れを悲みて
事細々と書送る
弟英夫が玉章に

父は驚き馳せて來つ
着換の衣も無き迄に
つらき生活を忍びたる
姉弟憐れむ涙かな

俊子の父は聞くにつけ
悪さの數を重ねたる
融の姉が舉動を
老の心に怒りしが

折柄此室に入來つる
弟英夫は一枚の
新聞紙をば示しつゝ
此欄を見よとぞ怒るなる

俄の事に驚きさて
言はるゝ儘に父と子が
見る新聞の其中に
如何なる事や書かれけん

つらき運命に惱む身を
猶其上に苦むる
融の姉や富美子等が
鬼にも似たる悪策

あらぬ濡衣着せられて
口惜涙に咽ぶ子の
脊搔撫てゝ老人は
堪へぬ怒に震ひつゝ

十二片戀

行水に敷かくよりも果敢なきは

思はぬ人を思ふなりけり

今、川面は暮れ初めて
夕靄淡く靡きつゝ
樹立の中なかに聳え立つ
高殿たかどのに灯ひは點りたり

庭は隅より黒みつゝ
人を魔界に引かんとて
襲ふが如き夜の翼は
一刻毎に迫る哉

斯かる處に密めきて
語る三人は誰ならむ
暗にほのめく花の香は
百合があらじか白菊か

母屋より照らす淡き灯に
面を見れば人鬼の
剛の姉と富美子とが
何をか語るひそくと

伴れし男を顧みて
俊子を追はん謀計
成りしをいとも嬉しげに
禮言ふ様の白々し

あはれや成らぬ片戀に
身を焦がしたる螢火の
消えなん末の命をば
知らぬ人こそあはれなれ

折しもあれや玄關に
いと聲高に争へる
人の聲音の聞こゆるに
三人は其處に出て行く

俊子の耻を雪がんと
此家に來りし其父は
融の姉と見るよりも
袖を捉へて動かさず

融の姉と富美子とが
憎き謀の數々を
主人日頭の其前に
發きて責めて歸りけり

望破れし其上に
父の叱を身に受けて
獨悲しく身悶ゆる
富美子の上の笑止さや

戀ふる富美子が冷やけき
心の中を知らずして
偽られたる口惜しさに
泣くや鷹山文學士

我戀成らん爲ところ
身の名譽をも犠牲にして
俊子の上を傷くる
其曲事も爲しぬるを

事顯はれて憂耻の
つらき我身を顧みぬ
富美子が胸のつれなさを
思ふもいと口惜しく

融とほるの姉あねを頼たのみつゝ
せめて我わが身を憐あはれみて
富美よみ子こに戀こひを傳つたへよと
面おもて激はげみて搔かき口く説とく

此この人ひとのみに罪つみ着きせて
見み離はなすことの流しか石すがに
底そこの心こころに忍しのびざる
融とほるの姉あねは惱なやみしが

思おもひ込こみたる鷹たか山やまが
責せむる言葉ことばの激はげしさ
怖おそれて富美よみ子こ勸すすめつゝ
怪あやし縁えはしを結むすばせぬ

あゝ踏ふみ迷まよふ人ひとの道みち
條すぢ理ぢ無なき戀こひの奥おく山やまを
踏ふみ分わかけ上のぼる鷹たか山やまと
富美よみ子この末すえや如何いかならん

日頭次官と高嶺は
不義の驕奢にあきたらず
其勢に任せつゝ
重ぬる罪ぞ怖ろしき

十三 變る淵瀨

世の中は何かつれなる飛鳥川

昨日の淵ぞ今日は瀨に成る

正しからざる舉動を
いつ迄神の許す可き
日頭次官と高嶺は
犯せし罪のあらはれて

あはれ昨日の富の身を
今日は冷めたき牢の中
月もさし來ぬ暗闇に
悔の涙を絞るかな

榮の人の姫君と
尊まれたる過去を
夢かとのみに迷ひつゝ
富美子は獨らさ思

忘るとすれど思出る
眼銳き人々に
送られ行きし我父の
後姿の佗しさよ

あゝ我戀は成る由も
波にたゞよふ捨小舟
思はぬ人を寄邊にと
頼む浮身の淺間しや

泣^なけど號^{ごう}けど詮^{せん}方も
嵐^{あらし}ぞ松^{まつ}に音^ねづれて
淋^{さび}しさ添^そふる宵^よ々の
袂^{たもと}はひぢやまさるらん

融^{とほる}の姉^{あね}は尙^{なほ}更^{さら}に
榮^{さかえ}の雲^{くも}の高^{たか}さより
突^{つき}墜^{おと}されし心^{こゝろ}地^ちして
胸^{むね}徒^{いとづ}らに惱^{なや}みつゝ

頼^{たのみ}無^なき身^みの如^い何^かにして
後^{のち}の月^{つき}日^ひを送^{おく}らんと
昔^{むかし}の夫^{つま}が紀^{かた}念^みなる
我^{わが}子^こ抱^{いだ}きて歎^{なげ}きしが

世^よは花^{はな}櫻^{ざくら}咲^さぬると
人^{ひと}の心^{こゝろ}も浮^うく頃^{ころ}を
夫^{つま}高^{たか}嶺^{みね}に會^あはんとて
淋^{さび}しく行^ゆくか監^{かん}獄^{ごく}に

待つ間程無く出て來し
夫の顔を見るよりも
先立つものは涙にて
頓に出づべき言も無し

話のあらば疾くせよと
急き立てられて此後を
如何にせましと泣くく
訴へ出る言の葉を

夫は怒の聲高く
我慰むる言も無く
己が身のみを思ふなる
情無き妻に用は無し

汝と縁もこれ迄と
思ひも寄らぬ言の葉を
いひ説く間もあらばこそ
看守は夫を伴れ去りぬ

とり残されて泣き伏せる
融の姉の其胸は
亂れくして死ぬる迄
悶え苦む惱みかな

俊子は力泣々に
歸る我家の居間の中
其家さへも今日よりは
我家ならぬ悲みに

泣崩折れてありけるが
思ひ定めて我子をば
婢女共に伴れ立ちて
行くや新橋ステーション

せめて頼みの我子をば
離すつらさを忍びつゝ
涙隠して祖父の手に
送る心ぞ思はるゝ

折柄來つる鷹山と
富美子は何處行くやらん
可憐の母は露の目に
消え行く煙眺めつゝ

十四 散行く花

花ちらす風のやどりは誰か知る

われにしらせよ行きてうらみん

四月も末と成ぬれば
榮華暇無き櫻花
夕の風に散り過ぎて
樹々は青葉の若みどり

牧の野邊には羊子の
美し夢や見るならん
都は聞くも忌はしき
罪の噂のいと高し

不義の榮華の驕樂は
久しからずと知れど尙
俊子は日頭高嶺が
俄の事に驚きて

實に幻の華に似る
人の上やと今更に
汚れし富の儂無さを
父共々に歎きしが

憎き乍らも縁深き
家の不幸を見過すは
道に背ける事ぞとて
俊子は清き真情の

日頭の家やいかばかり
世を侘ぶらんと思ひては
尋ね往かまく欲へども
父の言葉に止められて

夜を種々の思ひ寝に
夢も結ばぬ折しもあれ
門の戸叩くもの音に
出づれば我を迎ひ人

何處よりぞと尋ねれば
高嶺家より参りぬと
手渡す文箱受取りて
見れば融の姉が文

披けば墨もにじみ書
「今生の別れ路に
妾が願聞き入れて
來させ給へ」と記されぬ

見^みるに俊^と子は驚^{おどろ}きて
猶^{なほ}疑^{うたが}ひて止^とむなる
父^{ちち}の言^{こと}葉^はも聞^き入^いれず
行^ゆくや俵^{くさ}の足^{あし}迅^{はや}し

融^{とける}の姉^{あね}は入^いて來^こし
俊^と子^こをそれと見^みるよりも
悔^くの涙^{なみだ}を潛^{はら}然^くと
蒼^{あを}き面^{おもて}に流^{なが}せしが

「神^{かみ}の咎^{とがめ}を免^{まぬ}かぬ
我^{わが}身^みは罪^{つみ}に死^しぬるなり
あはれ昔^{むかし}のつれなさを
許^{ゆる}せ」と言^いふも虫^{むし}の息^{いき}

毒^{どく}を吞^のみたる唇^{くちびる}は
血^ちの氣^けも失^うせて震^{ふる}ひつゝ
枕^{まくら}上^{がみ}なる灯^{ともしび}の
光^{ひかり}淡^{うす}きも物^{もの}悲^{かな}し

俊子は涙拭ひつゝ
罪を悔ひたる我義姉が
清き心をいと惜しみ
情も深く手を握りて

昔の事は昨夜の
夢と忘れて諸共に
仲睦まじく暮らさんと
いと殊勝にも慰むる

折柄父が來れるに
霎時の間ぞと馳せ出し
後姿に打佗ぶる
眼には露さへ浮べつゝ

融の姉は力無き
身をば起して短刀に
我胸深く貫けば
迸る血は禁度無く

許し給へと言ふのみを
紀念と置きて散果つる
花の命の果敢無さや
月も朧に曇りけり

十五 主なき宿

うちつけに淋しくもあるか紅葉も

ぬし無き宿は色無かりけり

庭の遣水からくと
涸盡く夏の暑さにも
涙乾かぬ袖袂
又憂き秋を迎へけり

榮空しき春の夜の
果敢無き夢と消え果て
草葉の蔭に眠るなる
人の思や如何ならん

俊子は悲し思をば
筆に言はせて書送る
文字も涙に浸みつゝ
西のみ空を眺めしが

學の業を勵むなる
夫の心をくぢかじと
意を注けて大方の
愁は胸に收めつゝ

父と弟の慰めに
我身は安く在るなれば
み心安くおはせよと
書くに誠は籠りけり

やがて待ち居し音信は
三月程経て来りつゝ
恩ある人の爲なれば
兎もあれ我は歸らんと

あるに嬉しき三人の
心の中の春めきや
歸らん日をば指折りて
待つ思こそ樂しけれ

あゝ二年が其間
夢にばかりぞ偲びたる
戀しき夫の手を握るも
今二月に迫れるか

彼よ是よと思ひては
俊子は嬉しさ悲しさに
胸覆へる思して
夢の心地に過ごせしが

夫が歸りの近づくに
數へも切れぬ辛勞の
心や融けて緩みけん
重き病に打臥しぬ

父と弟が驚きや
美津子共々介抱の
其甲斐ありて漸くに
露の命はとゞめしが

まだ起き兼ねし聞の中
訪ひ來し美津子止めつゝ
物語する折柄に
門に訪なふ人の聲

富美子の母が憂き辛き
涙の身をば運びつゝ
融の助け乞はんとして
俊子尋ねて來つるなり

父は昔の怨をば
猶執拗くも忘れ兼ね
老の心の一轍に
追返さんと思ふをば

俊子はそれと聞くよりも
遮り留めて通さじと
争ふ父を和めつゝ
迎へ導く居間の中

さし垂頭て頃刻は
出す言葉もなかくに
娘の罪を詫ぞ入る
親の心ぞあはれなる

俊子は眼をうるめつゝ
佗入る人を慰めて
夫共々盡さんと
情も深く誓ひしが

折柄来る電報は
何の便や傳ふらん
讀む人々の面には
輝く笑のこぼれつゝ

十六 春風

袖ひぢて結びし水のこぼれるを

春立つ今日の風やとくらん

小春日和の空霽れて
緑色濃き海の面は
波も起らぬのどかさや
風そよくと渡るなり

涙に日をば送りつゝ
辛き悲しき二年を
夢の心地に過ごしたる
俊子は春に相生の

松は常磐の色かへぬ
操の花や開くらん
戀しき夫を横濱に
迎ふる今日の嬉しさよ

あはれ夫を乗せ歸る
嬉しき船は刻々に
此處の港に近づきて
鳴らす汽笛の勇ましや

冬を凌ぎし紅梅の
今朝春に逢ふ心地して
浮べる笑も美しき
俊子の喜び如何ならん

頓て着きぬる戀夫と
俊子は固く手を握りて
無事を祝ほぐ其眼には
あはれ露さへ宿しつゝ

寔れし妻の面影を
それと見るにも痛はしさ
留守の苦勞を思ひ遣る
融の胸も動くなり

迎へに來つる人々は
融妹脊と共々に
紀念も深き送別の
折の宿にと來りしが

此地の夕の有様を
見物せんと共々に
町の方へと出語りて
跡は淋しき只二人

涙と共に語り出す
妻が悲しき辛勞の
其數々を聞くにつけ
融も共に咽びつゝ

たゞ二年が其程に
變り果てたる世の波の
其激しさを今更に
驚く夢の心地かな

あゝ昨日迄嚴めしく
聳えし榮の高樓は
荒吹く暴風に倒されて
あはれ砂に塗れつゝ

権勢も富も陽炎の
夢と消えぬ其跡を
猶憂秋の風吹きて
落葉悲しき夕まぐれ

恩を受けたる日頭家も
たゞ一人なる同胞の
姉も運命に誘はれて
暗に落ちぬるあはれさよ

融は眼うるめつゝ
愛しき俊子と語らへる
其よろこびも忘る迄
深き愁に沈みしが

それにつけても我妻が
纖弱き身もて数々の
つらさ悲さ凌ぎつる
其殊勝さの頼もしく

二人互に手を握りて
樂しく誓ふ行末や
愛の力は仇を爲す
凡てのものにうち勝ちて

目出度く集ふ人々が
花の笑顔を交はしつゝ
睦も固き植村の
家の榮は知られけり

十七 秋の思

あきの夜のあくるも知らず鳴虫は

わが如ものや悲しかるらむ

樹々の梢は美しく
茜の色に輝きて
垣の糸萩亂れ咲く
庭の風情の面白や

かゝる景色も却々に
愁の種と成りし身の
富美子の母は辛き世を
涙に過ぎす居間の中

憂知らぬげの世の人は
一つ家人うち揃ひ
千草花咲く秋の野に
さまよひ遊ぶ頃乍ら

あはれや夫は囚はれの
日蔭仰がぬ身と成りて
誰を力と頼むべき
人も波間の浮小舟

浮かれくつて鷹山と
手に手握りつゝ遊ぶなる
娘の上を思ふにも
露いと滋き袂かな

今日^け日久々^{ひさびさ}に歸^{かへ}りつる
富美^{とみ}子^こ捉^{とら}へて色々^{いろ}と
其^{その}亂^{みだ}れたる舉^よ動^まを
涙^{なみだ}乍^ならに責^せめぬれば

快^{こころよ}からぬ景^け色^{しき}して
庭^{にわ}の方^{かた}へと立^た出^でる
跡^{あと}を見送^{みおく}る其^{その}胸^{むね}は
張^{はり}も烈^さけなん心^こ地^ちして

あゝ何^{なん}なれば斯^かかる世^よに
女^{をんな}の身^みとは生^{うま}れ來^きて
つらき運^ま命^めに泣^なくやらん
と思^{おも}ふに胸^{むね}ぞ騒^{さわ}ぐなる

涙^{なみだ}に滿^みつる目^めをあげて
富美^{とみ}子^こ何^{なん}處^{ところ}と尋^{たず}ぬれば
庭^{にわ}の茂^{しげ}みに佇^たみ
物^{もの}思^{おも}ふらしき其^{その}姿^{すがた}

あはれ老いたる其母を
つらき思に沈ませて
我身は何を煩悶の
胸うち抱きて愁ふらん

富美子は摘みし草花を
いと憎げにも撈りつゝ
池のほとりに佇みて
思はず漏らすひとり言

戀しく思ふ植村の
融の君は歸れども
にくき俊子の妨げに
成らぬ思のうらめしや

手にせる草を投捨て
打垂頭るゝ折柄に
跡を慕ひて鷹山が
それと認めて來りつゝ

否む富美子を強ひつゝも
人無き室に誘ひて
恨の聲音凄じく
心變りを責むるなり

折しもあれや玄關に
訪なふ聲の聞こゆるに
室に錠をばおろしつゝ
男は下に降りて行く

跡に富美子は燃上る
怒に胸の騒ぎつゝ
いかで出んとあせりしが
ふと耳に入る階下の聲

聲は戀しき人なるに
心狂ひつ亂れつゝ
漸くにして馳出れば
早も融は還りけり

ぞれと聞きくより坐すわるなる
富美子とみこは胸むねも亂みだれ髪かみ
夢ゆめのこゝちに夕暮ゆふぐれの
公こう園えんの中なかを追おいぞ行ゆく

十八 おく露

あはれてふ言の葉ごとにおく露は

むかしを戀ふる涙なりけり

秋あきも漸やうやう暮くれ方の
谷や中なかのあたり來きて見みれば
晝ひるの空くら氣きも濕しめやかに
悲かなしさ迫せまる心地こころちかな

あゝ人の世に罪といひ
譽と言ふも幻像の
消えて果敢無き亡骸は
均しき土に歸りつゝ

墓の面に刻む字は

ことくしげに見ゆれども
位も富も何かせむ
夢ぞつめたき石の下

姉の墓参に來りたる
融妹背は今更に
深き愁に沈みつゝ
慕標の前に佇みぬ

「あはれ榮の望ましき
危き事も知らずして
魔の棲む淵に陥るりし
姉が運命の悲しさよ」

「神は悔ひたる罪人を
許し給ふと聞くものを
我から胸を貫きて
など憂き果は遂げにけん」

「よしや罪ある身なりとも
血を分ちたる同胞の
我には一人の姉なるを
いとも本意無き死別れ」

「悲しと言ふも聞こえざる
草葉の蔭に眠りつゝ
今は逢はむに術も無き
姉の面わぞ偲ばるゝ」

「獨言ちつゝ歎くなる
融の心思ひ遣り
妻の俊子も諸共に
咽ぶ涙の雨滋し」

融は涙拂ひつゝ
歸ると妻を促して
道も狭に散る落葉を
踏みしださつゝ徒行けば

いづこの寺に讀むやらん
幽に響く經の聲
夕悲しく暮れて行く
秋の啓示と聞かれつゝ

二人は又も謂知れぬ
涙に眼のうるみしが
思ひ返して諸共に
いざ歸らんと罷るとき

後の方に衣擦れの
音さやくと聞こえつゝ
融の君と呼び掛けて
近づき來るは富美子なり

俊子とこはそれと見るよりも
彼方かなたに身をば外はずせしが
富美子ふみこは媚こびをつくりつゝ
述のびる思おもひのくどくと

聞きくに融とけるは厭いとはしさ
疾とく立た去されと願ねがへども
流石さすがに夫それと言い兼ねる
心こゝろの中うちの苦くるしさや

言ことば盡つくして様さま々に
其行そのよる爲まを諫いさむれど
聞きかてぞ迷まよふ仇戀あひこひの
嫉妬ねたみに胸むねを焦こがすなり

折柄をりから此處こゝへ鷹山たかやまは
面色おもていろ變かへて馳來はきつゝ
二人ふたりの影かげを夫それと見みて
眼險まなこげしく睨にらみしが

泣ける富美子を引立て、
罵りつゝど歸行く
後姿を見送りて
融はひとり涙かな

十九 波の花

草も木も色かはれどもわたつみの

波の花にぞ秋なかりける

悲しかりける昨日をば
今日は嬉しき笑語
夫諸共に打伴れて
遊ぶ俊子の楽しさよ